



子どもを語るということ
— 精神分析を手掛かりに —

秋山茂幸

教育学の特別な溝

私は教育学を学んでいる者ですが、この世界に最初に足を踏み入れたころ、「教育を研究する人は、実際に教育するにあたっては、達人なんだろうなあ」などと素朴なことを思っていました。しかし、周りを見渡すと、必ずしもそうではなさそうなのです。

教育学の世界では「大先生」と呼ばれるような方々も、ご自身は学生との接し方に悩んでいたりと、自分も子どもとの関係を不器用に試行錯誤されているような、いわば「ふつうの大人」でした。次第に学問の世界に慣れて、一研究者としてどう身を立てていくかということに関心が集中していくと、「学問は学問であって、そういった個人的・主観的な事柄は

いったん棚の上へ上げておく」という何とも都合のよい思考法が身に付いていきます。しかし、いかに学問的かつ客観的な語り方をしようとしても、「えらい」先生であれ誰であれ、そこには自分なりの教育哲学とでもいえるべき、教育に対する一つのものの見方が隠されていたりするものです。

それは、自分自身が子ども時代にどのような教育を受けてきたかであるとか、大人になった自分自身が目の前の子どもに対してどのような教育をしているのかといったような、ある意味極めて卑近な具体的、実践的場面からつくり上げられていくものだと思います。

こういった、いわば「机上の学問」と「私自身の問題」との間に横たわる大きな溝は、近年ケアや臨床といったことが取りざたされている福祉や医療などさまざまな分野で、今まさに問われている事柄です。ただ、教育学がそれらと比べても特別なのは、

それが対象としている子どもという存在が、大人の誰しもが「かつてはそれであった存在」であるという点です。教育学におけるこの特別な溝がどのようなものか考えるにあたり、まずは、ささやかな問題の整理を試みることに、それがこの小文の目指すところです。

精神分析のイイカゲンさ

「子どもとはいったいどのような存在か」、「子どもとどう接したらよいのか」などといった素朴な問いを立ててみると、それに一般論で（いつでもどこでも誰にでも通用するものとして）答えを出すことがいかに難しい課題なのか、ということを教えてください。知があります。それは、「精神分析」です。精神分析を生み出したジグムント・フロイトという人は、「いつでもどこでも誰が見ても子どもとはこういうものだ」というような理論が存在する」と考え、

実際、自分がそうだと考えるものを示しました。その中でもエディプス・コンプレックス論は有名ですし、リビドーの発達段階論は後の心理学者が子どもの発達段階を考えるにあたって基礎としているものです。フロイトは自分が打ち立てた精神分析を客観的な一般理論としての科学にはかならないと頑なに主張しましたが、それがニセモノの科学だという批判は、当時から現在に至るまで長い間続いています。精神分析は、科学としてはイイカゲンなものかもしれない。これは精神分析が生まれたときからもっている傷ですが、ここでは見方を変えて（フロイトの意思には反しますが）、このイイカゲンさこそが、実は大事なものなのではないかと考えてみたいと思います。

そもそも精神分析は、フロイトが自分自身の夢を解釈しようと試みたところから始まりました。これはいわゆる自己分析であって、その理論の最終的な

根拠は、ひどく個人的かつ主観的なものです。この自分一人の問題に加えて、さらに治療という二者関係の話があります。もちろん、精神分析は心の問題を抱えた人に対してフロイトが関係をもち治療を試みるという、極めて実践的な場面から立ち上げられたものであり、理論と実践を何度も往復して手直していくことで練り上げられた知です。したがって、精神分析という一般理論の裏には、当のフロイトという一人の人間と名前をもった患者の存在が、常に息づいているわけです。

すなわち、精神分析は、名前をもった唯一の存在である「私」という人間のことを語ることで、さらには、同じく名前をもった唯一の存在である「あなた」と「私」の関係を語ることが、ほかの人々にとってどのような意味があるのか、そういった語りを積み重ねたものは果たして知と呼べるものなのかという問題を提起しているわけです。

これは一方で、人間（ここでの課題としては子ども）に関する一般理論、すなわち、いつでもどこでも誰にでも通用する理論とはそもそも何であるのか、という問い返しにもつながります。

一人称の子ども

さて、ここでの課題である子どものことに話を戻しましょう。フロイトが自分の夢を分析して発見したものの、それは一言でいえば、フロイト自身の心の中で生きている〈子ども〉でした。夢とは願望充足であるという、フロイトのよく知られた言葉の意味とは、人が普段無意識へと追いやってしまっている願望が夢の中で形を変えて現れてくるということですから。そして、無意識とは、大人が普段は抑圧している心奥底で息づいている自分の中の〈子ども〉の部分だといえます。この〈子ども〉は「子どもっぽさ（幼児性）」であり、「子ども時代」の思い出（幼児期

記憶）」であつたりします。大人は常にこの〈子ども〉を抱えもって日常生活を送っているのですが、この〈子ども〉はそのままで表には出てきません。大人は社会のルールや規範を身に付けている以上、この欲望そのままの〈子ども〉はむき出しの状態で見られることを許されず、常に変形を受けたり回りくどいやり方で現れてきたりするわけです。

フロイトにとつて、大人になるということとは、この〈子ども〉にふたをしてしまうことを意味しています。そして、ここは微妙なところですが、ふたをしたその自身の〈子ども〉は、自分が「かつてそれであったところの子どもそのもの」ではもうないともいえません。大人が自分の中に生きる子どもっぽさを見つめ返したり、子ども時代の記憶をたどるとき、〈子ども〉は常に大人のフィルターによつて侵食されているのです。言い換えると、大人は自分の中の〈子ども〉と向き合うとき、その都度その都度、新たな出会い

をしていると言えます。記憶の問題としていえば、子ども時代の記憶は振り返ることに、新たな意味を与えられ、新たな姿を現すものであるといえるでしょう。

したがって、われわれが一般に「子ども」と口にするとき、そこには、われわれ自身の中に棲む（子ども）と、それを口にする大人としての私自身のあり方が常に影響を与えているわけです。ここでは、このわれわれ自身の中に棲む（子ども）のことを「一人称の子ども」と呼んでおきたいと思います。

ちなみに、「棲む」とは、人間が主となって「住む」というのとは違い、人間ではないもの（動物や時には神々など）が自然と共生してゆく様を表すときに使われるように思います。「一人称の子ども」とは、心の奥底の自然的、動物的な世界ともいうべき場所に生きる何ものかであり、フロイトはこの自分の中にありながらも大人の「わたし」とは異なる

何ものかを「エス」（ドイツ語の三人称中性代名詞）と名づけました。

子どものカウンターパートナー

当たり前な話ですが、子どもという言葉は、大人という言葉なしには存在しません。これらは二つで一つとでも言うべき対になる言葉であって、互いが互いを補い合うカウンターパートナーです。もしこの世界に子どもしかいなかったら、子どもという言葉自体はその意味と存在を失うことでしょう。そのうえで、次のような問いを立ててみたいと思います。すなわち、フロイトの一人称の子どものカウンターパートナーは何者でしょうか。それは、まず何より大人としてのフロイト自身です。言い換えると、大人としてのフロイトが「わたし」と口にするときの、まさにその「わたし」です（精神分析でいう「自我」のことです）。

ところで、実際に時間をさかのぼると、フロイトの子ども時代、フロイトをジギスムントと名付けよう呼んでいた人がいます（フロイトは思春期を過ぎるころになると、自らの名を縮めジクムントと名乗り始めます）。それは、もちろんフロイトの親です。子どもとしてのフロイトのカウンターパートナーは、親にほかなりません。特に、フロイトにとって父ヤコブの存在は特別なものでした。

先に述べたように、精神分析はフロイトが自分の無意識を分析したところにその出発点があります。が、そのときフロイトにとって最大の問題になったのが亡き父の存在でした。幼きフロイト、ジギスムントが父ヤコブに対して、どのような感情を抱いていたのか、それを振り返り生き直すことこそが、自己分析のプロセスだったのです。それに際して、フロイトの聞き役となり父の代理役を演じたのが、フロイトの親友ヴィルヘルム・フリースです。このと

きフロイトは、自分の無意識の中で今もなお生きている父ヤコブと幼きジギスムントの関係を振り返りつつ、過去の感情を再体験しました。無意識の中に眠っていた「父ヤコブと子ジギスムントの関係」が、今ここにおいて「フリースとフロイトの関係」に重ね合わされたわけです。これを精神分析では「転移」と呼びます。

先に、われわれ自身の中に棲む〈子ども〉という言葉方をしましたが、これはさらに正確に書き換えなければなりません。〈子ども〉には常にその対であるところの〈親〉という存在がセットで付いてまわるのであって、われわれ自身の中に棲むのは〈子どもと親の関係〉なのです。大人である「わたし」が自らの中の〈子ども〉と出会うということは、すなわち、自分の子ども時代の親と再び出会うということでもあり、そのときの関係を生き直すということとを意味しています（自分の中の親とは精神分析で

いう「超自我」のことです。

さらにここでも治療関係の話を加えておきましょう。フロイトの自分の中の〈子どもと親の関係〉と向き合うという努力から出発した精神分析は、患者を目の前にした一対一の治療行為としては、まず何よりフロイトが患者の中の〈子どもと親の関係〉と向き合うという仕方で進みました。というのも、フロイトにとって心の病とは、今ここにいる患者の「わたし」が自分の中に棲む〈子どもと親の関係〉との出会い方に問題をもっているからこそ生じるものであったからです。転移を通じた生き直しを経ることによって、患者の中の〈子どもと親の関係〉と「わたし」の間の出会い方を新たに組み替えることこそが、精神分析の目指すものです。

話が少し入り組んできました。ここでの課題に戻り、話の要点だけ取り出しましょう。われわれが一般に「子ども」と口にするとき、そこには、われわれ

自身の中に棲む〈子ども〉、それとコインの表裏の関係にある〈親〉、そして、それを口にする大人としての「わたし」自身、これらの関係性のあり方が重層的に影響を与えているということになります。

そして、この私のこと

先日、母が電話でこんなことを言うのです。

「お父さんが言ってたよ。『自分の教育は間違ってた。あなたが人の役に立つ仕事をしてくれていてうれしい』って」。

どうやら、ひよんなことから私の授業に関する学生の感想が、父の耳に届いたらしいのです。学生はときに教師を励ますために「授業がとても役に立った」というようなうれしいことを言ってくれます。おそらく、父はそれを聞いて文字どおりに受け取ってしまったのかもしれない。いずれにせよ予想外の形で親孝行できてしまったことに、心の中で学生

に感謝したのでした。

私の父は、幼稚園に通っていた私に小学校の算数の問題集をやらせるような教育熱心な父親で、私は当時、受験戦争と呼ばれたような過熱した競争の中でこれまで教育を受けてきました。そのせいか、教育学の道に進んだ当時、教育とは結局、大人の支配欲を満たし子どもの自主性を抑圧するものだったような議論や、詰め込み主義の学校を批判しその不要論を説くような議論に、心のどこかで共感していました。その後、研究なるものを続ける中で、そういった個人的な事柄は相対化されてゆきますが、結局、最終的には「私自身の問題」からは逃れられないとも思います。

だとしたなら、今ここで私が教育や子どもについてどのように語るかは、私が自分の中の「一人称の子ども」とどう出会うことができるか、という問題なのかもしれません。先の父の言葉の不思議な断言

調子には笑いさえ込み上げてきますが、そういったやりとりの中で、私は自分の中の「一人称の子ども」と何度も出会い直しを繰り返し、教育そして子どもについての語り方を変容させてゆくのもかもしれないと思います。

付記

以上の話に加えて、フロイトが一人の親として自分の子どもと向き合ったときの問題があります。すなわち、名前をもった唯一の存在である自分の子ども、「二人称の子ども」についてです。愛娘ゾフィーの死という出来事、自らの仕事を引き継いだアンナの存在、それらとフロイト理論の影響関係など論ずべき事柄は多いですが、紙幅が尽きてしまったので別の機会があれば考察したいと思います。

(大東文化大学、慶応義塾大学、青山学院大学)

非常勤講師)